



© Yuki Nakase

Sunny 5th Avenue, New York City

人種、思想、器材のるじぼ

「常識」という概念がどれほど掴みどころのない不確かなものか、日本の国境を跨いで気が付いたことの1つです。多種多様な民族が混在して暮らしているニューヨークでは、自身の「あたりまえ」を相手に求める習慣はなく、むしろ個々の違いを興味深いと感じる人が多いように見受けられます。したがって、言葉に変換された情報に頼る傾向があり、一つ一つ主張しなければ相手の理解は期待できません。ニューヨークでは、前例のない新しいアイデアや人材が生かされる可能性を持ち合わせているがゆえに、「常識」を定義できず、自分の要求や成果を直接的かつ明確に伝えることが結果を生むようです。

日本でお世話になった先輩照明家がロケで渡米された際、「どうしてアメリカには「ダボ」がないのか。すべての器材のボルトをいちいちレンチで締めているから時間がかかってしょうがない。」とおっしゃいました。アメリカにも「ダボ」はあります。日本のものと同じ形状ではありませんが、それらは「Pin」と呼ばれ、その受け口は「TVMP」、自在クランプ「Mafer Clamp」、センチュリースタンドのげんこつ「Gag」などバラエティに富んでいます。確かに、器材とハンガーをボルトによって固定する方法が劇場の仕事では主流ですが、イベントや映画、テレビの照明業務ではさまざまな現場の状況に対応するためにハードウェアもリギングも種類が豊富です。したがって、ジャンルに問わず幅広く受注する照明器材レンタル会社は貸し出したものがどのように使用されるかを一概に断定できず、借主は器材と付属品をすべて指定して発注する必要があります。

す。

器材同様に、照明の仕込みも仕事の種類と現場により千差万別です。すべての会場に回路を常設したバトンがあるわけではなく、吊点があるのはまだ良いほうで、照明器材を吊ることのできる何かしらとそれに対応するハードウェアを探したり、照明用のパイプやトラスを仕込むことにおける安全確保から始まる業務も多いです。中規模以上の仕事、たとえばPark Avenue Armoryでのファッションショーなどでは、照明用のトラスをリギング会社が仕込みますが、小規模の仕事、たとえばChelsea地区にあるギャラリーでの展示会などでは、照明オペレーターがリギングも仕込みます。何が仕事の規模を大中小に振り分け、誰がリギングを請け負うかの明確な指標はなく、現場ごとに予算と規模により判断されます。したがって、照明仕込みの仕事といってもオペレーターに求める役目はさまざまで、仕事内容の十分な伝達と理解、状況に対応できる技量が不可欠と言えるでしょう。

「常識」とらわれない移民の国アメリカだからこそ、学歴、人種、出身国、年齢や性別にとらわれることなく、すべての人に成功の道が開かれていることは大変素晴らしいことです。しかし、誰にでもわかるような出世の枠組みが明示されていないため、一生懸命に課題をこなせば結果が伴うとは限らず、臨機応変さやユーモア、自己顕示能力といった個人の力量にかかっています。「能ある鷹は爪を隠す」という日本人の美德は捨てて、自分の成果や望みを直接的に伝えることが、ニューヨークで信頼を得るための第一歩かもしれません。